

2023年度 八戸学院大学

地域経営学科・人間健康学科・看護学科

一般選抜Ⅱ期

## 国語

### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
5. 問題冊子は持ち帰ってよい。

【I】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かつてブナの森は村の水源や燃料、建築材など多様な資源の供給源であった。というより森と村とは一体となった必須の共生空間であり、その関係性が破綻すれば村の生活はたちゆかない。こうした生活と一体となった自然のあり方を「生産資源」として見直すことが①テイショウウ<sup>1</sup>されている。たとえば森を、食料や木材などのように単独で取り出せる資源の集合としてではなく、その場にあることで多面的な意味をなすものとしての森、つまりその生態系全体を②ミツセツ<sup>2</sup>な不可分の総合的な資源として考えるあり方である。ブナはもちろん家の建築材であり、炭の材料として切り出されはするが、森の形を崩すまでに切られることはない。それはブナの森が村の水源となり、同時に雪崩を防いでもいるからである。また、森の中は春は山菜、秋はキノコの生産の場となっている。森は森としてそこにあることでその全体がまさに「生態資源」なのである。材木の寄せ集めではない生きた森だからこそ有効な人と自然との共生がここには見られるのである。

こうしたあり方は、考えてみれば人が自然の中で暮らすときにはごくあたりまえのことである。人は、自分も含めた生態系の中でその（A）が絶えないように暮らさねばならないからであり、そのような目先の欲望を（B）する技術、文化を創りあげてきた人々のみが永続してきたというのが人類の歴史であったはずである。しかし、人は次第に都市に住むようになり、必要なものを個々の資源として遠い自然から収奪してくるだけの生活様式、いわゆる都市文化を創りあげてきた。こうして、自然の中に一体的に暮らす「自然文化」と、自然を資源の供給源としてその外におくことで成立する「都市文化」という新たな対比が生まれた。それは当然人の生き方、考え方にも大きな（C）を生じさせてきただろう。

かつて、村の周辺の自然は生活上の環境として日々認識され、そこからの糧を頼りに日々の生活が営まれてきた。しかし、森との共生を失った都市にとってもはや森は遠い存在でしかなく、森を訪れることも少なくなった。（I）、森を木材やレクリエーション資源としてしかその意味を見出し得ないようになってしまった。人から見えなくなった

森は木材資源の供給地として伐採され年々その面積を狭め、その豊かさや多様な機能とは急速に失われてきた。残り少なくなった森は科学、主として生態学の対象として研究され、むしろ本やテレビをとおしての、その成果が人々の森への間接的な認識となった。かつては一体のものであった人々の森に対する認識と利用形態とは、都市文化にあっては、森の科学的認識と資源利用とにみごとに③ブندگانされてしまった。

1 近代科学が対象をより客観化するとすれば、科学はまさに都市の文化ともいえ、その一つの典型である。森が身近にあるうちはあえて切り刻み数字化するような科学的調査を行う必要はなかったのではないだろうか。たとえば、ブナ林に台風の被害があったとしても、それは森に入って一回りすれば、その全体像が数字としてではなくともどれほどのものであったかはかなり明確に意識され得たのではないかと思われる。それは被害にあった身近な人々の悲しみや生活のあり様を必ずしも科学的に私たちが認識しないまでも、私たちはそれらを十分に理解し、共感しつつ共に暮らしているのにほぼ等しいものではないだろうか。

それでも科学的な価値としてだけでは森の意味を考え、森に共感をよせるわずかな人々が自然保護にとりくみ始めている。だが、その自然保護の運動はなぜか評判が良くない。自然を壊す側のいわゆる開発派からではなく、むしろ環境保護派といわれる側からの非難の声が結構ある。いわく、「自然保護」などはおこがましい、人間は自然に守られて生きていたのであって、そうした保護という考え方が改めなければならぬ、というのである。しかし、それには疑問がある。一体、何のために自然保護がおこなわれるのだろうか。自然保護についての④ロンセツの多くは結果的に「人のため」に行きつく。たとえば、きれいな水や空気は豊かで⑤ケンゼンな自然があつてはじめて人に供給されるし、食料も産業の資源もとはすべて自然からである。ガンやエイズの特効薬の発見にも熱帯のジャングルなどあらゆる生物の宝庫である自然地域が必要とされている。現在では、こうした自然を生物資源の観点からみることもその保護を考える上でも重要な根拠になっているのだが、それは、明らかに周囲の環境からすべての資源を調達しなければならぬ都市文化に特有の考え方である。

「Ⅱ」、森を自然科学として理解するあり方や資源として保護しようとするあり方が、実は両方とも都市文化そ

のものだということがわかる。現代が直面する環境問題が地球規模にまで急速に拡大した根本原因はまさにこの都市文化にあり、これは明らかに現在の自然から資源を奪い浪費するだけの都市のあり方が問題にされているのである。かといってかつてのようには狭い地域の自然と一体になった共生的空間に人が閉じこもるわけにはいかない。人々の意識と移動とはもはや地球規模にまで拡大し、宇宙にまでその足跡が及ぼうとしている。「宇宙船地球号」はもはや観念だけのものではなく、日々テレビで目にする地球の映像と相まって、まさにわれわれの世界像そのものである。地球はもはや、人の背後にあって人を支えている森とその森に支えられて生活する人とを一体のものとしてのせている、宇宙を漂うただ一つの村にすぎない。都市文化を否定するのではなく、地球をトータルに「Ⅲ」とする新しい自然像を人々に供給しうる科学こそが新しい文明への転換をなし得るものではないかと思う。

渡辺隆一『ブナの森で考えたこと』より

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 (A)・(B)・(C)に入る語として最も適当なものを、次のアからカの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 抑制    イ 増幅    ウ 資源    エ 製造    オ 一致    カ 相違

問三 「Ⅰ」、「Ⅱ」に入る語として最も適当なものを、次のアからエの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ    ア だが    イ そして    ウ 一方    エ なぜなら  
Ⅱ    ア このように    イ そもそも    ウ むしろ    エ しかしながら

問四 傍線部1とあるが、なぜそういえるのか。その理由として最も適当なものを、次のアからエの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 都市文化こそ自然の豊かさと多様な機能とを保存してきたといえるから。
- イ 都市文化は自然に支えられて生きている人々を常に保護し育成してきたから。
- ウ 都市文化は人々の欲望を満足させながら、常に新しい科学文化を創ってきたから。
- エ 都市文化が自然を対象として分離することで、資源の供給源としてのみそれを活用してきたから。

問五 〔Ⅲ〕に入る語として最も適当なものを、次のアからエの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自然文化
- イ 自然保護
- ウ 生態資源
- エ 都市文化

問六 本文の内容と矛盾しないものを、次のアからエの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自然を資源の供給源として考えるあり方は、自然保護の立場からは排除されるべきだと思われる。
- イ 都市文化が進展するにつれて、人々は自然を客観的にデジタル化して把握することが可能となってきた。
- ウ 地球規模に拡大した環境問題を解決するには、都市文化を否定し、かつての自然文化にもどるべきである。
- エ 人間は自然に守られて生きているから、自然保護という考え方を改めよという批判が開発派から寄せられている。

問七 「自然保護」に関するあなたの考えを百字以内で書きなさい。

【Ⅱ】 次の文章は、静養に来た主人公が、川の中でもがく赤蛙を見ている場面である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

赤蛙は波に全く翻弄されつつある。かろうじて浮いているにすぎぬようだが、それが彼の必死の姿であることは、彼の浮いている石陰のすぐ近くには渦巻きがあつて、絶えずそこへ彼を引きずり込もうとしていることからわかるのだ。彼に残された①カツロはたった一つきりだった。石にはい上がることである。だがその石の面たるやほとんど直立していて、そのうえに水垢でてらてらに滑すべつこくなっているのだ。長い後肢も水では②チヨウヤク力もきかず、無力に伸ばしたりかがめたりするのみだった。時々彼の前肢は石の小さなくぼみに取りついたが、すぐにくるとひっくり返つて紅い斑紋はんもんのある黄色な腹をむなしくもがいた。私は何か長い棒のようなものを差し伸べてやりたかつたが、そんなものは見あたらなかつた。今はただじつとその帰趨きすうを見守っているばかりである。

やがて赤蛙は最後の飛びつきらしいものを石のくぼみに向かって試みた。そうして1くるつとひっくり返ると黄色い腹を上にしたまま、何の抵抗らしいものも示さずに、むしろ静かに、すうつと消えるようなおもむきで、渦巻きの中のみこまれていった。私は流れに沿うて小走りに走った。赤蛙が再び浮くかもしれない川面のあたりに眼をこらした。しかし彼は今度はもう二度と浮き上がってはこなかつた。

2 私はあたりが急に死んだように静かになつたのを感じた。事実、にわかには薄暗くなつてもきていた。

私は歩きながらさつきからのことを考え続けた。秋の夕べ、不可解な③カクトウを演じたあげく、④セイコン尽きて波間に没し去つた赤蛙の運命は、滑稽というよりは⑤ヒゲキ的なものに思えた。彼を駆り立てていたあの執念の原動力はいったい何であつたのだろう。それは依然わからない。わかるはずもない。しかし私には3本能的な生の衝動以上のものであるとしか思えなかつた。活動にはいる前にじつとうづくまっていた姿、急流に無二無三に突っこんで行つた姿、洲すの端につかまってほつとしていた姿―すべてそこには表情があつた。心理さえあつた。それらは人間の場合のようにこつちに伝わってきた。明確な目的意志にもとづいて行動しているものからでなくてはその感じは来ない。ましてや、あの波間に没し去つた最後の瞬間に至つては。そこには刀折れ、矢尽きた感じがあつた。力の限り戦

って、最後に運命に従順なものの姿であった。そういうものだけが持つ静けささえあった。馬とか犬とか猫とかいうような動物ではないのだ。蛙なのだ。蛙からさえこの感じが来る、というこの事実が私を強く打った。

私は自然界の神秘ということを深く感じていた。私としては実に久方ぶりのことであった。天体のこと、宇宙のことを考え、そこを標準として考えを立ててみる、ということは私などにも時たまある。それは一種の逃避かもしれぬ。しかし豁然<sup>注2</sup>とした、救われたような心の状態を得るのが常である。その時と今とは同じではない。しかし自然の神秘を考える時にもたらされる、厳粛な敬虔なひきしまった気持ち、それでいて4何か眼に見えぬ大きな意志も感じてそこに信頼を寄せている感じには、両者に共通なものがあった。

私は昼出た時とは全くちがった気持ちになって宿へ帰った。暗い寒い部屋も、不親切な人間たちも、今はもう何も苦にはならなかった。私はしばらくでも俗悪な社会と人生を忘れることができたのである。私は翌日その地を去った。

病気で長く寝つくようになってからも、私は夢のなかで赤蛙に逢った。私は夢のなかで色を見るということはめったにない人間だ。しかし5波間に没する瞬間の赤蛙の黄色い腹と紅の斑紋とは妖しいばかりに鮮明だった。

島木健作「赤蛙」より

注1 帰趨<sup>注1</sup> Ⅱきすう。結果として行き着くところ。注2 豁然<sup>注2</sup> Ⅱかつぜん。景色が眼前にぱっと開けるように、迷いやうたがいなどが突然解けるさま。

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部1「くるつとひっくり返ると黄色い腹を上にしたまま、何の抵抗らしいものも示さずに、むしろ静かに、すうつと消えるようなおもむきで、渦巻きの中にのみこまれていった」とあるが、このときの赤蛙の姿を別どのように表現しているか。文中から十字で抜き出して答えなさい。

問三 傍線部2「私はあたりが急に死んだように静かになったのを感じた」とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近いものを、次のアからエの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 赤蛙があっけなく死んでしまったことを知って、すっかり絶望的な気持ちになってしまった。
- イ 赤蛙を見守り続けた緊張感が体から抜けるとともに、蛙の運命からくる深い思いにとらわれた。
- ウ 赤蛙のあれほどの懸命な姿が見られなくなってしまい、それまでの興味が急に薄れてしまった。
- エ 赤蛙が力尽きて流れに没してしまったことから、なんとなく自分も運命の尽きるのを予感した。

問四 傍線部3「本能的な生の衝動以上のもの」を別の言い方で表しているところを、文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問五 傍線部4「何か眼に見えぬ大きな意志も感じてそこに信頼を寄せている感じ」が、赤蛙の様子を通して具体的に表現されている一文がある。文中からその一文を抜き出し、最初の五字で答えなさい。

問六 傍線部5「波間に没する瞬間の赤蛙の黄色い腹と紅の斑紋とは妖しいばかりに鮮明だった」から、「私」のどんな気持ちを読み取れるか。最も適当なものを、次のアからオの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の死の予感。
- イ 蛙を助けなかったことへの後悔。
- ウ 病氣回復への希望。
- エ 自然界の不気味さ。
- オ 自然の神秘への畏敬の念。